



JCV ラオス人民民主共和国

視察報告書

2023 年 3 月 26 日～4 月 1 日



世界の
子どもに
ワクチン
を
日本委員会

JCV

Japan Committee
Vaccines for
the World's Children

認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会



[催行概要]

目的 : ご寄付がワクチンとして子ども達に届いている現状を支援者様に実際に見ていただき支援者様との関係を強化すること。支援国の国土、自然、生活、経済の状況をワクチン接種時事情の背景として情報蒐集し、理解すること。

期間 : 2023年3月26日(日)～4月1日(土)

視察国 : ラオス人民民主共和国

参加支援者 : 9名 朝日信用金庫 平井 利昭 様
株式会社 Good Service 山村 秀炯 様
燦 福祉作業所 天成舎 石原 久子 様
株式会社スタンディングポイント 松岡 利昌 様
Daido Sittipol Co., Ltd. 小池 理恵 様、Thanawan Srilum 様
日本リユースシステム株式会社 辻本 真子 様、田村 絵美里 様、Ean Sophea 様

J C V 職員 : 3名 奥寺 憲穂 (事務局長)
清水 大輔 (募金開発グループ)
乙津 俊輔 (広報・啓発・教育グループ)

カメラマン : 1名 大島 伸司

協力 : UNICEF ラオス事務所、ラオス保健省 国家予防接種プログラム(NIP)
東武トップツアーズ (J C V スポンサー)、柴橋商会 (J C V スポンサー)



ワットタイ国際空港に到着した一行

【1日目：2023年3月26日（日）】

日本出発・ヴィエンチャン到着

午前7時30分、成田空港に集合した一行は、午前9時30発のベトナム航空にてベトナム・ホーチミンでの乗継、カンボジア・プノンペンでの機内待機を経て、現地時間午後7時20分に、ラオス人民民主共和国の首都、ヴィエンチャンのワットタイ国際空港に到着した。カンボジアとタイから参加された方々とは、プノンペン、ワットタイ国際空港でそれぞれ合流した。

ホテルでは、UNICEF ラオス事務所 アルトロ・ノンボリ副代表が出迎えてくれた。この後、UNICEFのスタッフには、最終日にラオスを離れるまで、全行程に帯同して現地の村々を案内いただき、今回の視察をサポートしていただくことになる。



ラオスの名物料理ラーブ



三輪タクシーのトゥクトゥク



国家予防接種プログラム事務所でのブリーフィングの様子

【2日目：2023年3月27日（月）】

ヴィエンチャン市内／国家予防接種プログラム事務所訪問

視察行程を開始する。まずは、ラオス保健省 国家予防接種プログラム（National Immunization Program）事務所を訪問。国家予防接種プログラム副長のコンサイ・フォンフェンハック氏から、ラオス国内における感染症ワクチン接種の状況や、医療・保健体制の実情を交えてレクチャーを受ける。その後、中央保冷库にて、かつて JCV が贈った大型保冷库をはじめ感染症ワクチンの保管体制を視察した。

「日本によるポリオワクチンの接種活動は、JICA により、1989 年から 2000 年にかけて、ラオス国内からのポリオ根絶を目的に始められた。接種活動を行いながら、日本のソニーのトランシーバーを使った無線連絡体制の整備に対しても支援をしてもらった。その後、（2007 年から）JCV の支援に移った。ワクチン関係については、現在、JCV からの支援が大きな力になっている。JCV の支援がなければ、今、どれくらいポリオが広がっていたか分からない」とコンサイ氏。JCV の日本の支援者の皆さんの志は、しっかりと受け止めてくれていた。

接種を取り巻くラオスの課題としては、物を運ぶための道路事情が悪いこと、ダム建設に伴う住民の移住が多いことなど、地理的な要素が多い。また、ラオスには 49 の少数民族が存在しており、国境周辺部に住む少数民族の人々のワクチン接種に対する理解度が低いことも課題の一つだという。

JICA ラオス事務所訪問

独立行政法人 国際協力機構、JICA ラオス事務所を訪問し、長瀬利雄ラオス事務所長（筆頭代表）と泉田隆史代表から、ラオスの経済状況をはじめ、保健・医療、教育といった子どもたちを取り巻く環境の推移と現状を伺った。

「新型コロナウイルス感染症に対する水際対策やロックダウンにより観光客がゼロになるなど、経済的にはかなりの痛手を受けた。厳しい国家財政の中、保健・医療、教育にすら政府の予算が出せなくなり、GDP 比で 5% 拠出できていたものが 3% に減少した。現状、ある程度はコロナを乗り切っているが、しわ寄せはかなりある」と長瀬所長。



訪問した JICA オフィスで記念撮影



UNICEF ラオス事務所のピア・レベッロ・ブリット代表



中央保冷库で保管されていたポリオワクチン



パークセーで立ち寄った市場

また、子ども達が直面している課題として、泉田代表からは、「コロナの影響で、感染を恐れて病院に行かない国民が多く、従来の感染症対策のためのワクチン接種率も下がってしまった。

ロックダウン中に働き手となった子ども達の復学も遅れている。ラオスの初等教育終了時の学力レベルは、元々、内陸国という性質もあって、周辺国に比べ教育レベルが著しく低く、影響が心配される。

2019 年時点で世界の SDGs 基準に達している人口の比率は、隣国ベトナムが 70~80%程度とされているが、ラオスは大きく引き離されている」との説明があった。

保健分野については、「ラオス国内には、ヘルスセンターが約 1,000 カ所ある。保健省としては、それぞれに最低 1 名、医師を配置したいが、地域間の偏りが大きく、課題となっている。看護師も、2 割はボランティアに依存しており、医師、看護師の育成が喫緊の課題。そのために、国家資格による免許制度の構築を進めている」とのお話をいただいた。

UNICEF ラオス事務所を訪問

ヴィエンチャン市内の UNICEF ラオス事務所を訪問し、昼食をとりながらブリーフィングを行う。ピア・レベッロ・ブリット代表から、ラオス国内の感染症対策の子どもワクチン接種の実情を伺った。現在のラオスにとって、「JCV は、民間向けの包括的なワクチン支援を継続して続けている唯一の存在であり、非常に助かっている。ワクチンだけ、一部のコールドチェーンだけを抜き出して期間限定で支援したいという申し出はあるが、包括的かつ期間の定めのない継続的な支援をしてくれる団体は、JCV 以外にない。国同士ではなく、日本の皆様とラオスの子ども達や家族をつなぐ人間同士の支援を続けてくださっていることに感銘を受けている」と謝辞が寄せられた。

その後、ワットタイ国際空港からラオス南部のパークセー国際空港へ移動した。



ノンサ村でのポリオワクチン投与体験の様子

【3日目：2023年3月28日（火）】

チャンパーサック県ノンサ村の寺院で「出張ワクチン接種」視察

パークセー市街地から車で1時間ほど南に下ったノンサ村へ。古代遺跡、ワット・プーの近くにある小さな村だ。この日は、村の寺院が「出張ワクチン接種の会場」となっており、周辺の村々からも子どもを連れて母親が続々とやってくる。ヘルスセンターのスタッフは、母親が持参した母子手帳と管理用の台帳を照合しながら、それぞれに必要なワクチンを確認し、順に子どもにワクチンを接種していく。会場では、母親の同意を得た上で、JCV視察ツアーのメンバーが、経口タイプのポリオワクチンの投与を体験した。

「出張ワクチン接種」会場で Baci（バーシー）の儀式に招待

出張ワクチン接種の会場である寺院で、ノンサ村の長老達から、視察の道中の安全祈願として Baci（バーシー）と呼ばれる儀式に招待された。これはラオスの伝統的な精霊信仰に根差すもので、長老達曰く、「人の体には32個の精霊が宿っており、それが体内にいれば幸せに過ごせ、外に出てしまうと不幸が起きる。精霊が体の外に出やすいのは、結婚や出産、旅行といった人生の節目の時。だから、精霊が体内から出ないように、あるいは出てしまった精霊を呼び戻すためにこの儀式を行うのだ」とのこと。儀式の内容は、長老達が祭壇に供えられた綿の糸を次々に私達の手首に巻いてくださるというもの。「3日は外してはいけない」と注意があった。視察ツアーのメンバーは皆、たくさんの糸を巻いていただいた。



ノンサ村での Baci の儀式



ノン・ビエンヘルスセンターで保管されていたワクチン



チャンパーサック県の施設に設置された JCV が支援した保冷库



ボーラウェン高原の未舗装道路

ノン・ビエン（Nong Vien）ヘルスセンターを訪問

3 部屋程度の小さなヘルスセンター。医療スタッフは 9 名、内、看護師が 5 名、その他 4 名はボランティアである。医師はいない。周辺の 17 の村、約 14,000 人の住民をカバーし、産婦人科として出産にも対応している。精密機器などはないが、必要があれば帝王切開まで行っているとのこと。

また、ラオスの看護師教育プログラムの課題について説明を受けた。国の財政状況が厳しいため、看護師として働きたくても欠員補充以外に募集があまりないのが現状。それでも志のある方がボランティアとして各地のヘルスセンターなどで活躍しているのだという。ラオスでは出産にかかる費用は無料だが、お礼としてチップを払う文化があるため、それを給与の代わりとしているボランティアの方もいるという。ここでも、ラオスの国としての貧しさの影響と医療従事者の方々の努力を実感した。

チャンパーサック県南部の副中央ワクチン保冷库を視察

翌日の主要視察地、アッタプーへ向かう途中、地域のワクチン保冷施設に立ち寄った。首都の中央保冷库に比べれば小規模ではあるが、保冷库が稼働し、ワクチンがしっかりと保管されていることを確認した。また、ラオスにおいては、中央保冷库から各県の保冷库、そして郡の保冷库というように、ピラミッド型のワクチン搬送の仕組みが構築されているとの説明を UNICEF スタッフより受けた。ワクチンの消費量が多い大規模な病院に関しては、これとは別に中央保冷库からの搬送の仕組みがあるとのこと。

この後、大河メコン川を渡るために、いったん北上してパークセーに戻り、全長 1,380m の周辺で唯一の橋、日本の援助によって 2000 年に開通した「ラオス・日本大橋」を渡って、ラオスの南西部、カンボジアとベトナムとの国境に近いアッタプーに向かう。行程、およそ 200 km。途中、何度か休憩を挟みつつ、一部未舗装の凸凹道を交えてボーラウェン高原を駆け抜けること 3 時間半、夕刻に到着。



サケアヘルスセンターでのワクチン接種



サケアヘルスセンターでワクチン接種を待つ母親と子ども達



サケアヘルスセンター院長のフィラボン氏



サケアヘルスセンターでタオルやエプロンを贈呈

【4日目：2023年3月29日（水）】

アッタプー県北部サケア村のヘルスセンターを訪問

アッタプー中心部から北へ小一時間。橋梁工事の最中、急ごしらえで作られた迂回路など、土がむき出しの道路を走り抜けて、サケア村へ。周辺は、昔ながらの高床式の簡素な木造の家が点在する。ラオス国民の70%は農業に従事しているとされる。5月から10月にかけての雨季ともなると、周辺は稲の緑で覆われるそうだが、この時期は乾季の終盤に向かうシーズンで、一帯は土色一色。

そんな中でも、感染症の子どもワクチン接種は地域に定着しており、村のヘルスセンターには毎日、子どもを連れた母親が接種や健康管理のためにやってくる。この日も、十数人ほどの母親が、子どもにワクチンを接種させるために訪れていた。

お話を聞かせてくれたのは、一人でも多くの人を助けたくて、この仕事に就いたという院長のフィラボン氏。MA（看護師の中では最上位）になって7年目で、アッタプー県出身の32歳。

「このヘルスセンターは、アッタプー県の3つの村を管轄。住民約6,300人をカバーし、ワクチン接種は毎日実施している。ラオスのヘルスセンターには、A、B、Cの3ランクがあって、サケアヘルスセンターは「A」ランク。医療スタッフは、私、中級の看護師、助産師の4名に、ボランティアが3名いる。ここでは1カ月に延べ約250人の子どもが接種を受け、その内、約150人が1歳未満。10~20%は、ベトナム国境の山岳地帯から来るため、日帰りでは不可能な人達も多い」

また、昔はヘルスセンターもなかったが、近年は政府の方針もあって、かなり改善してきたとのこと。遠隔地での医療、ワクチン接種に対応するため、移動式のサービスなども行っているようだ。ワクチン接種が定着していることを確認でき、喜ばしい一方、山岳地域の子どものために接種を行うための課題も垣間見えた。

その後、ヘルスセンターでは、JCV のスポンサーで、横浜市で医療・介護・福祉施設向けにリネンサービスを手掛ける柴橋商会様からお預かりした、タオルやエプロンを贈った。フィラポン氏からは、「出産や診療の際に大切に使います」と謝辞があった。

また、アッタプー県保健局の責任者であるヴィエンサイ氏から、県全体のワクチン接種状況について説明があった。「アッタプーは周囲（隣のセーコーン県）に有名な寺院が近いため、便利で多くの人が集まってくる。2022 年のアッタプー県の感染症ワクチンの接種率は 98%に達している（政府目標は 94%）。通常、ワクチンは 3 か月分を申請して送ってもらう。計画外の接種も発生するため、予備も準備している」とのこと。想像していた以上にワクチン接種率が高いことに、驚きと嬉しさを感じた。

サケア・ノウア小学校を訪問

村内にある、サケア・ノウア小学校を訪問。全校生徒 330 名と先生方が、校庭に椅子を並べて私達の到着を待ってくれていた。

「小さな頃にワクチン接種をしたことがありますか？」と質問すると、ほとんどの子ども達が手を挙げてくれた。ワクチン接種が根付いていることを確認するとともに、この子達が健康に学校に通っている姿を見て、感染症の予防に私たちのワクチンが役立ったことを実感した。

また、当日、学校で女の子への HPV ワクチンの接種が行われていたので見学した。私達が贈ったものではないが、子ども達にとって、ワクチンの接種を受けることは当たり前になっているようだ。



質問に手を挙げるサケア・ノウア小学校の子ども達



子ども達に歌のプレゼントを行うツアーメンバー



サケア・ノウア小学校の子ども達の笑顔



勉強に励むサケア・ノウア小学校の子ども達

この小学校で、JCV 視察ツアーのメンバーから、子ども達に歌と学習用品のプレゼントを行った。普段、外国人は訪れない地域ということもあり、初めは子ども達も緊張気味だったが、徐々に打ち解け、たくさんの笑顔を見ることができた。子ども達も先生方も、そして私達も笑顔になれる交流となった。



出迎えてくださったアッタプー県立病院 副院長のホンカム氏



アッタプー県立病院でのワクチン接種



発達度合いのチェックを受けに来ていた赤ちゃん



アッタプー県立病院のエコー検査室

【5日目：2023年3月30日（木）】

アッタプー県立病院を訪問

周辺地域では最も大きく、様々な診療科を備えた県立の総合病院を訪問。日本の地方都市、町村部の病院と比べても、規模は小さく、設備も整っているとは言い難い。しかし、県や周辺地域の医療の要として、地域のヘルスセンターでは対応できない医療を一手に引き受け、住民の命を守るために医師・看護師が日々、奮闘している。

ここでは、ワクチンの接種の他、生まれてきた赤ちゃんの発達度合いのチェックの現場、エコー検査室の設備なども視察した。この日は偶然、病院に勤める看護師の女性が、赤ちゃんを連れてワクチン接種に来院しており、視察ツアーのメンバーが経口ポリオワクチンの投与の体験をさせてもらった。

案内をしてくださった副院長のホンカム氏からは、「ラオス国、国民のためにも、ワクチンは必要。ワクチンがなければ、子ども達も国も元気にならない」との言葉をいただき、医療従事者としてワクチン接種を重要視していることが伺えた。

この後、往路と同じくボーラウェン高原を通してパークセーへと戻る。さらに、パークセー国際空港から空路でヴィエンチャンへと移動した。合わせて6時間の長距離移動の後、夕刻に到着。



マホソット病院でのワクチン接種



小児病棟で医師の方々へ質問

【6日目：2023年3月31日（金）】

首都ヴィエンチャンの中央病院「マホソット病院」を訪問

全国から人々が訪れる、ラオス有数の医療拠点であるマホソット病院を訪問。現在、中国の資本により近代的で大規模な病院に生まれ変わりつつある。合計6棟を建設する計画で、小児科などが入る2棟が既に竣工し、稼働している。この日も、数多くの赤ちゃんが来院し、JCV視察メンバーも、ポリオや三種混合のワクチンを接種する現場に立ち会った。

清潔で、近代的な施設で、小児科の新生児室には20個もの保育器が並ぶ。別の階にはPICU（小児ICU）も置かれている。カイシー副院長からは、「マホソット病院は、中央の4つの郡をカバーしている。各郡にはそれぞれ郡立病院があり、連携して対応にあたっている。子どもの病気で多いのは、順に、①肺炎、②下痢、③栄養失調。妊婦にとっての最近の課題は、『鉄分の不足』が挙げられる。新型コロナウイルスの流行下では、薬品（サプリ）が不足し、未熟児も多かった。日本の方々から継続的なワクチン支援をいただいているおかげで、感染症で亡くなる子どもは確実に減少している。私達もさらに努力をしていきたい」とコロナ禍の医療や現在の課題についての説明とワクチン支援への謝辞をいただいた。

また、院内各所を案内していただいたラスミン医師からは「コロナ感染拡大当時は、乳幼児の肺炎が多く発症していた。現在は減ってきたが、人工呼吸器が不足しており、中古でもよいから、支援が欲しい。」との要望があった。

在ラオス日本国大使公邸に昼食会ご招待

在ラオス日本国大使館、小林賢一特命全権大使から、JCV視察ツアーメンバー全員を昼食会にお招きいただき、大使公邸を訪問した。

小林大使からは、「ラオス政府の財政状況は依然、厳しい状況にある。これに対して、赤字の国営企業の改革、無駄の削減といった様々な対策を講じている。日本との関係では、近年、ラオス航空が日本の熊本空港への就航を計画したり、工業系の日本の中小企業がラオスに進出するなど、少しずつではあるものの、両国の関わりも増えつつある。より多くの日本企業が進出し、ラオスの経済発展が進めば、政府の財政状況も改善して、より多くのラオスの子ども達が救われるようになる未来が来ると思う」とのお話があった。



小林特命全権大使（右から4人目）との記念撮影



保健省 国家予防接種プログラム事務所でのデブリーフィング

保健省 国家予防接種プログラム（National Immunization Program）事務所でデブリーフィング

今回の JCV ラオス視察ツアーの締めくくりとして、ラオス保健省 国家予防接種プログラム事務所を訪問。母子保健課長のバンディット・スンフォンファクディ氏と同副課長のチャンサワン氏、コンサイ氏らと席を共にし、5 日間の視察を通じた現地の姿、自らの体験を思い起こしながら、質疑応答を交えて、1 時間半にわたり、最後のデブリーフィングを行った。

バンディット氏からは、「私は、2 カ月前に、母子保健課長に着任した。元々、小児科、感染症を専門にしてきた。JCV の皆さんには、引き続き、子ども達へのワクチン接種に向けたご支援をお願いしたい。まだまだ改善すべきことはあるが、これからもより良いワクチン接種の態勢を探っていく」とのお話があった。

以下、質疑応答・感想（発言順）

小池 理恵さん（Daido Sittipol）

病院で、子供の死因の第 3 位が「栄養失調」と聞いた。対策は？

バンディット氏

以前は余裕があって妊婦にサプリを与えられていたが、コロナの感染により、購入予算がなくなり、与えられていない。サプリはタイからの輸入が大半だが、ウクライナ戦争の影響もあって輸入税が 2 倍になっており、影響が大きい。妊婦には、鉄分はじめ栄養分をできるだけ摂れるように、案内をしている。

平井 利昭さん（朝日信用金庫）

病院の現場では、様々なものが足りないと言う。金も人も機材も足りないけれど、現場の皆さんが元気に活動されていた。

辻本 真子さん（日本リユースシステム）

コロナによって、ポリオワクチンの接種率が下がったと聞いた。今後、どうやって回復させていくのか？

バンディット氏

パンデミック中は、街全体がロックダウンとなり、ポリオワクチンの接種も滞った。コロナワクチンとポリオワクチンのどちらを優先するか、迷った人も多かった。しかし、これからは確実にポリオワクチンの接種を進めていく。

小池 理恵さん (Daido Sittipol)

中央と地方には大きな差がある。解消するための方策は？

バンディット氏

だいぶ格差がある。妊婦の死亡率を低減するためには、保健分野だけでなく、様々な分野の連携が必要だ。栄養を確保するためには食糧省の関与も必要だし、インフラ整備、物流の態勢整備も必要。クリアしていかなければならないのは意識しているが、地方と中央を同時に高めていくことはできない。

しかし、妊婦の死亡を減らすのは、中央も地方も関係ない。世界各国には、ワクチンだけではなく、様々な機器なども支援してほしい。中古でも構わない。インフラに力を入れながら、人材育成、ソフトの改善も進めなければならない。

バンディット氏

JCV の皆さんには今回、貴重な意見をいただき、感謝する。皆さんのお話も交えてまとめると、今後のポイントは以下の 5 つになる。

- 1) 従来のワクチン接種サービスは、基本的には良好に進んでいる。さらに質を高めるために、支援の量を増やせるよう、皆さんの協力をお願いしたい。
- 2) 中央と地方の格差については、今後のミッションとして、さらに地方の改善が必要。
- 3) 妊婦の栄養不足も重要な課題。鉄分の接種拡大に取り組んでいく。
- 4) コロナ禍で不十分だった感染症ワクチン接種も、さらに可能な限りプラスしていく。
- 5) 保冷庫はワクチン接種の大きなカギ。地方のヘルスセンターの管理に十分に留意する。



国家予防接種プログラムメンバーと記念撮影

すべての行程を終えた視察団は、午後 8 時、ヴィエンチャンのワットタイ国際空港を発って、ベトナム・ハノイのノイバイ国際空港でトランジットの後、翌 4 月 1 日（日）、午前 0 時 20 分発のベトナム航空便にて帰国の途に就いた。

Daido Sittipol の小池様、Srilum 様は、午後 8 時 30 分発のタイ国際航空にて、バンコクのスワンナプーム国際空港に向かい、同日中に無事、タイに帰国された。

カンボジアに帰国される日本リユースシステムの田村様、Sopheha 様の 2 名は、航空便の関係で、もう 1 泊ヴィエンチャンにとどまる。

【7日目：2023年4月1日（土）】

全員、無事帰国

午前7時35分、タイ、カンボジアに帰国の4名を除き、参加支援者5名と同行スタッフ4名の視察団は成田空港に到着。3月から導入された新しい入国時のコロナ対策「Visit Japan Web」の手続きを済ませて、全員、無事に帰国、ツアーを解散した。

日本リユースシステムの田村様、Sopheha 様も、午前11時、ワットタイ国際空港発のベトナム航空便にてヴィエンチャンを発って、13時にプノンペン国際空港に着き、カンボジアに帰国された

今回は、2019年8月に実施した「バヌアツ共和国」以来、3年半ぶりの支援国視察ツアーの再開。この間、常時支援4か国の UNICEF 現地事務所と定期的に連絡を取り合い、新型コロナウイルス感染下の各国の状況や国内の政治、経済状況などを伺うとともに、JCV が支援する感染症への子どもワクチンの接種状況、管理状態を随時確認してきた。

とはいえ、いずれも開発途上国であるだけに、経済へのダメージは少なくなく、勢い、保健・医療、さらには感染症ワクチン支援にも混乱を来した。今回5年ぶりに訪問したラオス人民民主共和国も例に漏れず、財政面が脆弱なこともあって、大きな影響が避けられなかったようだ。

そんな中でも、保健省をはじめ、病院、ヘルスセンターの現場医療関係者の不断努力により、コロナ禍からの早期の復旧に取り組み、子ども達への感染症ワクチン接種を着実に実行されている。今回は特に、南部のやせた農業地帯に足を踏み入れた。首都ヴィエンチャンなどに比べると明らかに医療体制に格差はあるものの、南部4県を統括する保健省の幹部から、「ワクチンの接種率は、目標の94%を超えて、98%に達している」と聞いて、ほっと胸を撫でた。

ラオス保健省関係部局の皆様、ワクチンの手当てから各地との連携に活躍する UNICEF ラオス事務所の皆様をはじめ、今回の JCV 視察ツアーを支えてくださった皆様の熱意を持った活動に敬意を表して、今回の JCV 視察ツアーが完遂できたことに感謝を申し上げる。



[JCV のラオス支援]

2007 年に UNICEF ラオスと保健省から要請を受けて JCV が支援を開始しました。以来、DPT ワクチンの接種率は 50%（2007 年）から 88%（2014 年）へ向上するなど、ワクチン接種環境は改善傾向にありました。

しかし、全体的に山がちな国土に 49 の民族が暮らすため、民族によって異なる言語と山間部の集落への交通アクセスの問題もあり、ワクチン接種普及の障壁は依然として存在しています。また、山間部に暮らす子ども達へワクチンを届ける努力が重ねられていましたが、コロナの影響で定期ワクチン接種体制が手薄になり、課題は山積しています。UNICEF ラオスによると、2022 年のはしかワクチン接種率の 全国平均が 80%のところ、60%台の地域が 2 カ所、50%台の地域が 1 カ所ありました。

私たちは、ラオス全土で安定した定期予防接種基盤ができるまで、保健省や UNICEF ラオス事務所はじめ関係の皆様と協力しながら活動を続けます。

[ラオスの基礎情報]

面積：

約 24 万平方キロメートル（日本の本州とほぼ同じ）

人口：

約 733 万人（2021 年、ラオス統計センター）

首都：

ヴィエンチャン

民族：

ラオ族（全人口の約半数以上）を含む計 50 民族

言語：

ラオス語（ラオ語）

宗教：

仏教

